

十九世紀初頭ラージャスターン地方における村書記について

佐藤正哲

一 はじめに

ムガル帝国の支配が弱体化するにつれ、それまで帝国の支配下にあった領主・豪族層ならびに帝国の地方官は自立化の方向を模索し始め、帝国の崩壊後イギリス東インド会社と濃淡さまざまな政治的・軍事的関係を持ちつつ、最終的にはその多くが、イギリス支配下に藩王国、地主層として存続するようになったのは周知の事実である。十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて、インド亜大陸の各地ではイギリス東インド会社による植民地支配が進行しつつあったが、この時期にインド西北部のラージャスターン地方では、ムガル帝国の支配下に「所領」を安堵され、「内政自治」を認められて存続してきた一ヒンドゥー王国コータ(Kota)が、宰相ザリム・シング(Zalim Singh, A.D. 1739-1823)のもとで中央権力の強化をはかり、政治権力としてきわめて独自の歴史的動向を示しつつあった。

本稿は筆者が予定しているザーリム・シングの時代と社会の研究の一環として現在進めている村長層の地域社会における存在形態とかれらへの支配政策についての考察の過程で生み出されたもので、村長とともに村落社会の統治の中心ともなるべき村書記（*patwari*）についての研究である。王国の中央が村落の統治や徴税に関する命令を発する時には、ほとんど慣用的といってよいほどに村長・村書記へという形で両者が文書に併記される形をとっている。かれらは村長の補佐として、村落社会における検地、徴税関係の記録とその保存をつかさどるものとして一般に理解されている。こうした理解はそれなりに正しいが、だからといって村落統治や徴税におけるかれらの職務や機能が、具体的に理解されているわけではなく、ましてや村落社会におけるかれらの存在形態などについては全く知られていないといえよう。

この小論は、村書記に対して出された王国の命令書やかれらが徴税関係の文書提出に際して中央に出した誓約書など、具体的な原史料の邦訳を通して、上記の点を考えてゆきたいと思う。原史料はラージャスターン州北部の町ピーカーネールにある州立文書館（*Rajasthan State Archives, Bikaner*）に所蔵されているこの地方の旧藩王諸国の文書のうち、旧コータ王国に属する主として徴税関係の文書で、ラージャスターニー語で記されたものを筆者が手書きで写してきたものである。邦訳文ならびに文中や注に掲げたローマ字化した文書の括弧と括弧内および句読点は、筆者が補充したものである。なお、命令書（*talik, parwana*）のうち、*talik*には本文の中央上部に、ヒンドゥー暦のサンバット暦とイスラーム暦のファスリー・サン暦の年代が併記されているが、いずれの命令書の末尾にも必ずサンバット暦が記されているので、右記の部分を掲げるのは煩雑になることから、邦訳文でも注においても、これを記載するのを省略した。

注

(1) この点については、さしあたり拙稿「十八世紀末ラージャスターン地方における村落社会」(亜細亜大学『アジア研究所紀要』第四号(一九七七)、同「十九世紀初頭ラージャスターン地方における在地支配の一断面」(亜細亜大学経済学会『経済学紀要』第六巻第一号、一九八〇年を参照。

二 史料の邦訳と若干の考証

(I)⁽¹⁾ (コータ)国王陛下ウメッド・シングからマドカルガル、ガートイー、ガートーリー、チエーチャット(の諸郡)ならびにその他の村の村長、村書記およびすべての農民に宛て。そちたちの(職や権利は)安堵された。村の支配をおこない、農耕をおこなえ。そちたちにはビーゴーリー税およびジャムダーリー税をサ
ンバット暦一八三九(西暦一七八二)年から四一(同八四)年までの三年間、その半額を免除したから、免除分を受けとれ。ビーゴーリー税およびジャムダーリー税の残り半額は、そちたちから徴収することになっているから、そのことを銘記されたし。また、そちたちの(納める)村書記税の金額は(徴税台帳類に?)記載されているので、そちたちの郡に属する村のうち村書記がいない所では、村書記税の金額の半分は、これを知行者に与え、残り半分は当方がそちたちから徴収する。また土地のすべてを耕作せよ、(耕作を)放棄したままにしてある(土地がある)ならば、それにも課税して徴収する。余分な争いごとは起さな
いように。サンバット暦一八三九年ジャイト月の陽半月六日(西暦一七八二年五月一八日)。

(II)⁽²⁾ (コータ)国王陛下ウメッド・シングからアターワー(郡)のケソープロ(村)のシャー・ソーウオー・

ルールに宛て。そちにマニングロール郡のイハーナー村の村書記職を与えてきたが、これを安堵した。(ついでには、当該の)村の支配をおこない、荒蕪地を耕地にかえ、新しい農民を住まわせ、水利をはかり、(村を)繁栄に導け。村書記の職務に精励し、慣行上の手当は郡で(徴収したものを)受けとれ。尊大にかまえて、ゆめゆめ(村民と)争いを起すな。(この命令書は)村長ジョーダーの命令(書のなかに一緒に記載した?)。サンバット暦一八六二年チャイト月の陽半月一三日(西暦一八〇五年四月一三日)。

さて、ザーリム・シングは一八世紀七〇年代初頭に王国の権力的地位にのぼり、以降五〇年余にわたって王国を支配したから、この二つの命令書はいずれもザーリム・シングの時代のものである。(I)はマドカルガル郡、ガートイー郡、ガートーリー郡、チェーチャット郡などの村長、村書記、農民にあたえられたもので、ビーゴリー税、ジャームダーリー税の半額を三年間にわたって免除すること、その他に関する命令である。これが如何なる理由で半額の免除になったのかはわからない。当時の状況としては、マラータの侵攻による戦争、略奪、荒廃などが考えられる。なお、ビーゴリー税は土地の広さの単位ビーガー(bigha)に由来するもので「農地税」、ジャームダーリー税についてはその語源はわからないが、農民以外に賦課される「非農民税」で、いずれも現金で徴収された。⁽³⁾

〈II〉はシャー・ソーウォー・ルールという者に、ケソープロ村の村書記職の安堵(thā kī khāre jāma rākhē)とその職務と服務の心がまえとをきわめて抽象的に指示した命令書である。この安堵状は村書記のいない

村に新しく村書記を任命する当時の命令書の記載内容と、新任の村書記に村書記職にともなう土地を与えるという記載以外は、ほとんど同じ内容である。⁽⁴⁾

ここでは、邦訳上のいくつかの問題点を考証しておきたい。まず〈I〉と〈II〉において、筆者が「村の支配をおこなえ」(gaon kī zamī kījē)と邦訳した部分についてである。「zamī」はラージャスターニー語の辞書(ラージャスターニー・ヒンディー)では「zamiāt, zamiyāt, zamīrat」のくずれたもので、「sēnā, thānā, adhikār」(軍、駐屯所、支配)の意味である。従って、「zamī kījē」は「兵を動かせ、支配せよ、権威を行使せよ」といった意味になる。

筆者は辞書の意味にとったが、これ以外に「zamī」を「zamin」(土地)の意味であるとし、「zamī kījē」を「耕作をおこなえ」という意味にとつてもよいと思われる使い方があつた。ラージャスターニー語の辞書には「zamī」に「zamin」の用法はないが、十八・十九世紀のコータ王国で使用されているラージャスターニー語(正確にはハーローティー語)の文書では、「zamī」がしばしば「zamin」の意味で用いられている事例が見られる。具体例をあげれば、「hal 125 kī zamī」(犁一二五丁が耕作する広さの土地)、「gaon kī achhī zamī hōt che」(村の土地が肥沃になった)というように、これらはどう見ても「zamī」が「zamin」の意味で用いられていると考えざるを得ない事例である。

また筆者にハーローティー語文書の読解を指導してくれた古老もまた、「zamī kījē」をヒンディー語の「khetī karō」(耕作せよ)の意味であると主張して、辞書の意味にとつた筆者の解釈を認めないこともあつた。実際「……を農民に分け与え、zamī karāī 種子をまき、農作物を栽培せよ」(karsyān ha dewāijē zamī karāī bīz

urāi sākḥ karāwje) は、かれの解釈の如くとるべきであらう。

しかし、「dharti ki zamit̃ kḥalsā ki taraf zamit̃ ki jō」は、「zamt̃ ki jō」(= zamit̃ ki jē) の解釈をするまでもなく、「dharti ki zamit̃」の「zamt̃」を「zamin」の意味にとれば、「土地の土地」(dharti=zamin) となつて意味が通じなくなる。また「zamt̃ bagraiyā karō mat̃」は「zamt̃ を悪化させるな」「zamt̃ をダメにさせるな」で、「zamt̃」を「土地」の意味に解することもできるが、これに続く語句が「zamt̃ rakḥē kharidjē」(「zamt̃ をわいて購入せよ」)であるから、「zamt̃」が「軍、支配」といった前者の意味で用いられていることがわかる。

ひるがえつて、筆者が「村の支配をおこなえ」と邦訳した「gaon ki zamit̃ ki jē」は、「村の(土地の)耕作をおこなえ」という意味にもとれることはいうまでもない。しかし、「zamt̃ ki jē」という用語は知行者や村長などがその官職に任命されたり土地を与えられたりした時に使用されるが、ブラーマンや寺院が土地を与えられた場合にはこうした用法が見られないようなので、ここではやはり筆者のような訳にしたがった。

つぎに「水利をはかれ」(pī palō karē)と訳した部分についてである。ラージャスターニー語の辞書には、「pīpalō」という単語はなく、「pī」は「pīti」のなまったものであるとし、そうすると「pītipalā」(語尾の ā, ā, ī は相互に容易に変化し、文書では pītipalā もよくみられる)になる。この単語の意味は「保護、援助」ということである。他方、「pīti」と「palō」を切り離して考えると、「pīti」は「飲む、飯ませる」の意味で、あり、「palō あるいは palā」は「pāl」の転じたもので、「堤、堤防、ダム」の意味ということになる。

筆者が写してきたラージャスターニー語の文書には、文章の切れ目はもちろんのこと、文節・単語の切れ目もなく、文字の連続である。従つて、この判読は必ずしも容易なことではなく、いずれの意味にもとれることが多

多ある。しかし、同じ単語や語句の使用のされ方の微妙な違いを文書の上で比較検討することによって、その意味・内容の確定されることが少なくない。

ところで、当時の村長職および村書記職の安堵状¹³には、「pīpālōあるいは pī pālō」を使った二つの全く同じような文章がある。まずその一つは、この邦訳文(Ⅱ)の原文と全く同じ使い方で、「村の支配をおこない、荒蕪地を耕地にかえ、新しい農民を住ませ、pīpālō karē (村を) 繁栄に導け」(gaon ki zamit kije padat dharti hakat karō nawādā karsān jamai pīpālō karē āwādāna kije)である。もう一つの用法は、「現在、村に耕作されずに遊んでいる土地があれば、これを全部耕作し、(村を) 繁栄に導け、pīpālō ki jāigāがあれば、これを pīpālō kariō、これを怠ってそのままにしておくならば、そちらは(当方(中央)の) 喚問にあうことになる」(abe i gaon ki dharti pari hōwē jō dam dam hakai āwādāna kariō pīpālō ki jāigā hōwē jyō hā pīpālō kariō (tē tē karwājyō) i ma kasar pari che tō tū ha pūchhwā ma āwsi)と云うものである。

右記の最初の方の文章に「pīpālō ≡ pītipālā」の意味「保護、援助」を入れてみると、「……新しい農民を住ませ、保護(援助)を与え、……」ということになり、これは意味をなす。しかし、これを後者の文章に入れてみると、「jāigā (時には jagē) は「土地、場所」であるから、「……繁栄を導け、保護(安全)の土地があれば、これに保護(援助)を与えよ……」ということになり、これでは意味が通じない。

逆にさきに述べたように、これを「pīti」と「pālō」(≡ pā)という二つの単語であると解釈する立場にたてば、「pīti pāl」を若干意識して「水利」とすれば前者の文章は邦訳通りになり、後者の訳は「……水利(用)の土地があれば、水利をはかり(れ)……」ということになる。なお前述の古老もまた「pīpālō」を「pīti」と「pālō」とし、

「pī」を「水を飲ませること」、「patō」を「井戸、タンク」だと筆者に説明してくれた。ほとんど同じような意味であり、その解釈に一応従うが、筆者はこれに若干手を加えて邦訳文のようにした。

最後に、〈II〉の邦訳文の末尾の部分に関してである。「(この命令書は) 村長ジョーダーの命令(書のなかに一緒に記載した?)」と訳している原文は、注(2)でも見るように、「par (wāng) Patel Jōdhā ki」と記されているだけで、この文字通りの意味は「命令(書は?) 村長の」である。この「par」と略されているのは、他の多くの同様な文書から「parwāng」(命令、命令書)のことであるが、ここの語句は慣用的用法で、余りにも簡潔すぎるためによくわからない。

村長ジョーダーとは、当時の関連文書からこの邦訳文にみられる郡マーンゲロールのファテプル(Fatepur)村の村長であることはまちがいない、当時それぞれの地域で有力な村長が、その地域の村長や村書記の地位や職の安堵状を一括して与えられていたのではないかと考えられる。当時コータ王国の実権を握っていた宰相ザーリム・シングの統治なканづく村長に対する支配政策が、こうした形であらわれていたのであろうか。この点については別稿にゆずることにする。

なお、以上の命令書は紙に書かれたものようであるが、古くは、例えば十七世紀には銅版文書(tāba patr)に刻されていたものらしく、サンバット暦(以下Sと略記する)一七四七(西暦一六九二)年の命令書には、村書記が五〇ビーガーの広さの土地を与えられた旨が刻された銅版文書を受けとっていることが記されている。⁽⁴⁾

注

- (1) "Mahārāja Mahārāo jī Shri Umed Singh jī bachnāu Madhkargari wā Ghāṭī Ghāṭōh Chechati wā wājē ga-

on kā patel patwārī samast karsān diśē aparanch thā kī jamā khātrē rākhē gaon kī zamī kījō hal kulī chālāwījō thā ha bīghōrī jāmdārī i. Sam(vat) (18)39 tā Sam(vat) (18)41 kā sāl 3 tāi ādhī bīghōrī jāmdārī māf karī chhe sun mujar pāwsō ādhī bīghōrī jāmdārī thā sun lēnī thāhārī chhe tī kī nisā kījō ar thā kā patwārā barār kā ru(piyā) mandyā chhe sun thā kā parganā kā gaon ma tō patwārī na hōī tī sun patwārā barār kā rupiyā ādhā tō jāgīrdār dēśī ar ādhā rupiyā thā pha sun lēwā ma āwsī ar dhartī sārī dām hakāī denī parī rahsī tī kō jamō bhārī lesī siwāī khechal na hōsī Miti Jaiṭh Sudī 6 Samvat 1839.” Parwānā S. 1839 in Tōjī docket cover.

(2) “Mahārāja Mahārō jī Shri Umed Singh jī bachnātu Kesōpuro Atāwā kī tī kā Shāh Sōwō Lāl diśē aparanch tī ha Mauza Ihānō Parganā Māngrōl kō tī kō patwārō bagsō chhe sun thā rī khātrē jamā rākhē gaon kī zamī kījē padāt dhartī hakat karō nawādā karsān jamāī pī pālō karē āwādāna kījē patwārā kā sigā kī chakrī kījē dasīūr parganā sar lījē garwāz hī khēchal kar matē par. Patel Jōdhā kī Miti Chait Sudī 13 Samvat 1862.”

⁴Tālk S. 1862 in Tōjī docket cover.

(3) 前掲拙稿「十八世紀末ラージャスターン地方における村落社会」一〇九—一一頁。

(4) Tālk S. 1862 and 1863 in Tōjī docket cover.

(5) Lālśa, Sītārām ed., Rājasthānī Sabd Kōś (Rājasthānī-Hindī Kōśh), Jodhpur, 1962-, vol. III, part 1, pp. 1066-67. Sākriyā, Badrīprasād and Bhūpatirām Sākriyā ed., Rājasthānī-Hindī Shabd Kōśh, Jaipur, 1977-, vol. I, pp. 427-28.

(6) Kāgzāt of dō urkō halā kō of Parganā Māngrōl, Samvat 1783 in Tōjī dō war kī Jamā Kharch Jamā Bandhī,

Samvat 1784, Bastā No. 96.

- (7) Parwānā S. 1860 in Tojī docket cover.
- (8) Talik S. 1860 in Khata Talik Abkān Jāgrdar, Samvat 1860, Bastā No. nil. (ゴトビダ、ヒダ K.T.A.J. S. 1860 ㄣダㄣ)。
- (9) Parwānā S. 1829 in Tojī docket cover.
- (10) Laṣa, S. ed., op. cit., vol. III, part 1, pp. 2521, 2640.
- (11) Ibid., Vol. III, part 1, pp. 2479, 2521.
- (12) 注では原文書をローマ字化す際、単語と単語の間を適宜切り離しておいた。
- (13) Talik S. 1862 and 1863 in Tojī docket cover.
- (14) “Mahārāja Shri Kisōr Singh jī bachnātu Parganā Māu kā Hawālāt Likhni Dās Hārā Chaudhri Sō Dat Shāh Khwsi diṣe aparanch Patwārā Mahāsij Māuza Banwāt me rahē che sun wā he hajūri sun dharit bighā 50 anke bighā pachās tābā patr duwāi che sun dharit kō parwānō kari dijō bar hu(kam) par(wānēt) hajūri kō Mitti Phagun Badi 14 Samvat 1747.” Parwānā S. 1747 in Tāqīm Parganā Māu, Samvat 1747.

三 村書記について

(1) ここまで理解されてきたコータ王国の地方行政機構について簡単にふれておきたい。別の機会に考察したように、王国の地方行政を担当する地方官には一般に二つのタイプがあつて、一方は中央から派遣されて郡行

政を担当する管理官（*hawālgir*）とも呼ぶべき郡代官と、同じく中央から任命されて郡衙に勤務する郡給与長官（*bagari*）以下の官僚層と、他方は在地の世襲的役人ともいふべき役人層で、郡レヴェルでは「帝国の郡役人」のカヌーンゴー（*kanūngo*）とチョードリー（*chudhri*）、村レヴェルではいわゆる村役人の村長（*patel*）、村書記（*patwari*）、村番（*sansari*）などであった。前者は中央から任命されて地方へ下向するからといって、かれらが地方に社会的、政治的あるいは経済的実力をもっていなかったと考えるのは大きな誤りで、かれらによっていかに、地方の特定地域に在地的勢力を形成・維持している者たちであった。

王国の地方行政の最高の地位にあるのはハワールギールで、通常は軍事・徴税関係を担当する三等官からなっていた。主として長官は軍事・警察関係を担当し、一般に戦士階級であるラージプートが任命され、時には部族の者（例えばグージャル部族の出身者）が任命されることもあった。次官以下は一般に徴税関係を担当し、これに任命されるのはチョードリー、シャー（*shah*）といったタイトルをもつ商人カーストの者か、パンチョーリー（*pancholi*）、タークル（*thakur*）のタイトルをもつ書記カーストの者たちであった。かれらのカーストの伝統的職業が、こうした実務的な仕事をやっているものであるから、かれらがこうした官職へ任命されたことはある意味では当然であろう。しかし、かれらの経済的実力が官僚として中央ならびに地方の政治的世界への進出ともなったであろうことは想像にかたくないところである。

ハワールギールの直接の指揮・命令下に職務を遂行する者は、郡役所に勤務する役人層を除き、村落の村長、村書記、村番などの村役人であった。なお、官としての創設は十七世紀末頃かと思われるピッラーダール（*biladār*）は、ザーリム・シングの時代になってからかなり重要視されるようになったが、ハワールギールとの関係はよく

わからない。この役人は糧秣・兵站關係を担当するものらしく、中央および地方レヴェルでは給与(長)官とも關係をもっていたようである。⁽²⁾ ハワールギールの指揮下に検地官 (taplar) として検地に従事し、検地帳 (kavir, khavir) を作成するカーヌーンゴー、チョードリーは、肝心のザーリム・シングの時代についてはよくわからないが、「帝国の郡役人」であつたかれらは、次に述べるように王国政府から十分な信頼を受けていなかったらしい。

検地に際して中央は、ハワールギールに対して検地官には信用をおかないようにと指示し、⁽³⁾ 検地帳、収穫予想高の報告書その他の徴税關係の文書の中央への送附に際しては、ハワールギール、あるいは村長、村書記の手を通じておこない、⁽⁴⁾ かつその提出には村長の署名を求めるというように、役人を相互に監視、牽制の關係においていた。

村長および村書記は、検地に従事し、収穫状況を調べ、収税の業務にたずさわつてその關係の文書類を作成するが、この際かれらはカーヌーンゴー、チョードリーに協力し、また後者も村長、村書記の協力を得て郡レヴェルの文書の作成をおこなっている。とはいえ、そのことが村長、村書記にとって、かれらの命令下に立つことを意味しているものではない。村長や村書記が命令を直接受けるのは、中央(国王)からを別とすれば、やはりハワールギールからのものであり、村内ではかれらが村番に命令を与えていた。次の一文は、村長、村書記の村における職務を示す興味深いものである。

〃(コータ)国王陛下ウメッド・シングからハノーチャー村の村長および村書記に宛て。そちたちの村の村番が(理由もなく)いなくなつてしまった。それ故、この村の(村番の)仕事をおこなわせるために、(郡都)ア

ターワーのアヒール部族に属するバルゴーという者を（村番に）任命した。従って、（この）村での（村番の）仕事をこなわせよ。また前々から村番には土地を与え、（かれのために村人には）khunchi 税および kharpō 税が賦課されている。それ故、この者に（これを）慣行に従って分与し、かつ村の境界に盜賊^{チョーリ}が出没するやも知れないから、これに用心をさせよ。不平をいうことなく村での仕事をおこない、（前任の）村番の家が（空家）であるから、（それを）この者に与えよ。サンバット曆一八二九年ジャイト月の陽半月一五日（西曆一七七

二年五月一六日）⁹⁵⁾

これは村からいなくなってしまった村番に代って、アヒール部族の者が新しい村番に任命されたことを記す命令書であるが、興味あるのは前々から村番用の一定の土地が村に確保されていることであり、またさきに逃亡した村番の家が新任の村番に与えられていることであろう。前任者の家もまた公的なもの、いわば「官舎」であったであろうか。それともかれの私的な所有物で、職務を放棄して逃亡したかどで没収されたのであろうか。

いづれにせよ、村長や村書記は、その官職や功労にともなう一定の報酬や賞与として、村に土地ないしは徴税権を与えられた者の権利を保護し、その管理下におく義務を負わされていた。また、かれらはその者たちが死去したり、逃亡したり、あるいはその授与が没収されたりした場合、国による新たな者が任命されるまで、あるいは特別な指示があるまで、その土地や徴税権の管理をおこない、新しい命令にしたがってこれを分与している。

土地の場合には、それが一応形として目に見えるものであるから、その権利の保護や管理は比較的スムーズにいったのかも知れないが、課税の減免というところ簡単にはゆかなかつたらしい。村に直営地をもつ者が、その土地に賦課される課税を減免された場合、その権利、利益が必ずしも十分に守られることがなかったのか、命令

書はその者に対していかなる難儀をも与えるな (kōi bat ki dikatī yā sun matī karō) として、村長、村書記に命令内容の遵守をきびしく要求している。⁽⁶⁾

村書記の職務のなかでとりわけ重要な仕事は、村の地稅台帳 (jama bandhī) 類の作成である。このためには、年間を通じて村における農耕状況などを注視していなければならなかったはずである。なかでも、收穫時はきわめて多忙で、かつ緊張を要したことであろう。かれは收穫がおこなわれるや否や、中央から派遣された穀物監視官 (aīthā) ならびに村長と協力し、村の広場に山のように積みあげられた收穫物の監視とその記録をおこない、国家と農民とのそれぞれの取り分の分割 (jata) をおこなうという一連の仕事に参加したからである。⁽⁷⁾

穀物監視官の主要な任務は、こうした取り分の分割に際して農民がおこなう欺瞞や不正な取得を監視し、防止することであり、また夜陰にまぎれて村民が收穫物をかすめ取ることの防止にあった。しかし、こうした監視が村民に対してのみ向けられただけでなく、時には外部からの略奪の防止にも向けられるものであった。

〃(コータ) 国王陛下ウメッド・シングからマルダー・ラチャー・(ラーム) に宛て。(そちの) 請願書が(当方に) 届き、一部始終を理解した。ウルマール郡のデーチャーケーリー村に盜賊が二五人ないし三〇人侵入した。(その時) 脱穀場では見張りをしていた者 (shah) が眠っていたが、(かれらの間で) 闘いがおこなわれ、賊は逃走した。(しかし、) この者は負傷したと(以上のように) 書いてあった。従って、今この者に薬と包帯 (malan patī) の代金として一〇ルピーを与えよ……。サンバット曆一八六〇年マーガ月の陰半月一二日 (西曆一八〇四年一月九日)。⁽⁸⁾

負傷した者への手当を引き出すために、請願書を国王のもとへ提出したマルダー・ラチャー・ラームについて

は、当時の別の命令書にも名前が見られるが、肩書がつけられていないのでどのような地位にあった者かわからない。⁽⁹⁾ なお、マルダー (Mardā あるいはミルダー) はカースト名らしいが多分かれはハワールギールか、ひょっとしたらさきに述べたビッラーダールであったかもしれない。ザーリム・シングの強力な統治がおこなわれている時にあっても、こうした盗賊団が収獲物を狙って村を襲ってきていることは、注意を要することであろう。これより六ヵ月ほど前に、この郡はマラータ武将ジャスワント・シング・ホルカルの軍隊の侵入と略奪を受けたもようである。そのためにも治安が不十分になり、盗賊が徘徊することになったのであろうか。⁽¹⁰⁾

いずれにせよ、村書記は村長とともに、国家の統治が村落レヴェルで円滑に機能するような役割を担われ、ハワールギールの指揮下に中央から派遣されてきた者やカーヌンゴー、チョードリーに協力して、村落の徴税関係の実務や文書類の作成、治安維持の一翼を担っていたといえよう。

それでは、以上のような職務に対して村書記はどのような報酬を得ていたのであろうか。地税台帳のなかには、*paivārtī*, *paivārtī barār* といった税目があり、邦訳〈Ⅱ〉の「慣行上の手当」(*dastūr*) といわれるものである。これは村長の手当 (*dikātī kā dastūr*) と同様に、一般に現物の形で直接生産者から徴収されていた。しかし、これは〈Ⅱ〉でもみたように、村書記への手当という名目で徴収されたものを、村書記が郡において、正確には郡の穀倉 (*ambar*) にでも集められたものから受けとっていたのではないだろうか。「*dastūr paraganā sar jīō*」とは、そうしたことを意味するものと解しておきたい。そうであるとすれば、村書記は村長と同様に村での徴税において、そこから自分の手当だとされている部分について勝手にとるわけにはゆかず、郡役所の監視を受けていたことになる。

この点は新しく村書記に任命された者が、その手当である現金を国王から受けとるよう指示されていることと相通じるものであろう。それはS・一七七四（西暦一七一七）年に村書記職に任命されたケイラーリー村のシャー・ラチー・ラームで、かれはその手当として月額二・五ルピーを与えられているが、このほかに土地を与えられているかどうかについての言及はみられない⁽¹¹⁾。

しかし、村書記への手当として最も重要なのは、一定の大きさの土地の下賜であり、この点は村長も同様である。S・一八六三（西暦一八〇六）年の命令書では、村書記に二五ビーガーの土地が与えられているが、これは既に述べた村番の土地と同様に、以前から村書記のために村に留保されていたものであった⁽¹²⁾。また「シャー・サメール（という名の）村書記に昔からの土地（*kadim dharti*）を与えた⁽¹³⁾」といった表現も同じことを述べたものである。こうした土地がどのようにして存在するようになったかはきわめて興味深い問題であるが、村長に与えられる土地と同様に、村の設立時や開墾の時にさかのぼるもので、国家の土地やかれらの免税地に由来するものではなからうか。

こうした村書記の土地は、村が知行者に与えられても、かれの土地からの収穫部分については、知行者も徴税できず、村書記の権利は保証されていた。右に見た村書記シャー・サメールに宛てられた命令書は、この点を具体的に示している。

（ゴータ）国王陛下ビーウ・シングから郡都チェーチャットの知行者ミール・チャインド（という者）の差配に宛て。そちらでシャー・サメールという村書記に昔から土地を与えている。（その広さ）三〇ビーガーで、（そこからの）収穫はかれに与えよ、かれにいかなる難儀をも与えることを禁ずる。サンバット暦一七七四年

マーガ月の陰半月六日（西暦一七一七年二月一三日）⁽¹⁴⁾。

このことは、逆に知行者が国王から役人その他に給付されている土地、免税地などに対しては、一般に徴税権を認められていなかったことを示している。これは国王からブラーマン、寺院などに与えられた土地についても同様で、その権利の保護について両者ともに軌を一にしている。

しかし、命令書の末尾にわざわざ記されている「いかなる難儀をも加えるな」（*kōi bat kī dīkai matī karō*）という語句は、知行者や徴税請負人がかれらの権利を侵害する事実が現実存在し、中央の命令が十分に守られていなかったことを示すものであろう。ザーリム・シングの時代の史料ではないが、実際にそうした事実が若干みられる。

（ゴータ）国王陛下ビーウ・シングからバローダ（郡）のハワールギールであるパルス・ラーム・ハーラー・チョードリー・ゴールダン、パンチョーリー・ジャスンに宛て。ラール・ビハーリー・ジー（寺院名）の寺院守にアチラーキーケーリー村の土地七一ビーガーをも与えているが、かれが（当方に）請願したことは、（この村の）徴税請負人が自分に難儀を加えたので、ラーム・シング殿の支配下（にある土地）に、出作り農民が行って（戻って？）しまった、と。そこで（そちは）かれに言へ、寺院守に難儀をかけるのをやめよ、と。サンバット
 暦一七六六年カルティカ月の陽半月六日（西暦一七〇九年九月一四日）⁽¹⁵⁾。

また、S・一七八〇（西暦一七二三）年の命令書では、知行者がブラーマン（*bhai*）の土地を侵害しているのに対して、国王はハワールギールに必要な措置をとるように命じている。⁽¹⁶⁾

このように村書記の官職や権利が、国家から保証され、それをもって社会的、政治的地位を維持し、経済生活

をおくつているとすれば、それは当然のことながら国家がその安全・保証代としてかれに貢納の義務を要求することになる。村書記は村長とともに、*peškashr* と呼ばれる貢納をおさめることが義務づけられている。これは村長職と同様に、村書記職の相続やそれを獲得した時に、つまり新たに村書記職に就いた時に納めねばならなかったものと考えられてきた。

しかし、S・一七八四（西暦一七二七）年のバローダ郡の文書⁽¹⁷⁾によれば、同年に同郡のすべての村から二〇ないし三〇ルピー前後のペーシユカシーが徴収されており、また新しく任命された者は七五ルピーの高額を支払っている。従つて、この点から考えると、ペーシユカシーは相続や実際に任命された時に納めるだけではなく、国家が必要な時に、場合によっては財政上の理由から、あるいはそれ以上に支配をかねておこなつたものと思われる。特に後者の場合、国家が名目的にも形式的にも、こうした権利を一時接収してあらためて与えるという手続きをおこない、国家がかれの任免の権利をもっているということを誇示し、支配の強化をはかるためにおこなつたものと考えられる。

いずれにせよ、貢納額の大きさは、ある程度かれが管轄する村の大きさ、つまりは仕事の量とそれと関係する実入りの大きさに比例していたのであろう。あるいは、この金額の大小には、書記職を同じ家系の者が代々世襲的に保持してきているかどうか、こういった保持の期間も考慮に入れられていたのかも知れない。S・一七七〇（西暦一七一三）年の王都コータの村書記の貢納額は一〇—ルピー⁽¹⁸⁾であつたのに対し、S・一七八四（同一七二七）年バローダ郡のムダウラー村の村書記の貢納額は七五ルピー⁽¹⁹⁾であつた。

それでは村書記に任命される者は、一体どのような社会的階層なのであつたらうか。すでに文中でもみてきた

ように、カースト名がわかつている者は、すべてシャー (shah) という金融商人のタイトルをもつ商人層であった。これは村落台帳の記録と叫びた帳簿関係の仕事が、かれらの伝統的職業の主要な部分と重なりあうものである以上、かれらのこうした官職への就任は当然かも知れない。しかし、かれらの商人としての経済的実力、村落社会における農作物の売買、金融といった面でのかれらの役割は、かれらが単に村書記だけの存在ではなかったことを示している。

邦訳の〈Ⅱ〉でもみたように、村書記に任命された者が、かれの出身村を記載されるほどに、任地の村とかれの出身村は近いところにあつたのであろう。S・一七八〇・八一（西暦一七二三・二四）年のバルサーナー郡の各郷のタクシム文書では、村の徴税を請け負っている者のなかには多数の商人 (shah) や村長の名前が見られるが、かれらのなかにも若干の村書記の名前が見出される。⁽²⁰⁾

また、ここではごく一例を示すにすぎないが、S・一七九四（西暦一七三七）年のバローダ郡のトーラン村の地税台帳には、実物で徴収されたものが現地で現金化される際、その購入者の名前が記載されている。ヒヨコ豆 (chana) を買った者が、村書記のシャー・スッカーという者で、名前は記されていないが村長と村書記がゴマ (goma)、タチナタ豆 (urad)、レンズ豆 (moth) の購入者となっている。⁽²¹⁾ こうした事例は、他の地税台帳類をみればよくみられる事実である。いずれにせよ、筆者の知るかぎりでは、シャー以外のカーストの者で村書記になっている事例が見出されないということは驚くべき事実である。

なお、村書記の管轄する村は必ずしも一カ村に限られなかったと思われるが、今の所十分な史料の裏付がないため、この点は保留しておきたい。また、村書記の所替えがあつたかどうか、という点については、今の所よく

わからない。ただ所替えというよりは、比較的よく交替が見られるようである。世襲と交替がどのような関係にあったか、十分に明らかにすることはできなかった。

注

(1) 拙稿「十七、十八世紀ムガル帝国の地方支配についてーラージヤスターン地方のコータ王国の事例ー」『アジア研究』第二三卷第二号、一九七六年。同「十八世紀ムガル帝国の地方支配と在地役人層」『亜細亜大学経済学会』経済学紀要』第四卷第一号、一九七八年。

(2) この点は別の機会に論じる予定である。

(3) "Mahārāja Shri Jagat Singh jī bachnātu Binaigā kā Hawālgir Bhīw Singh Rāihōr Shāh Abhai Rām Thākur Gōrdhan desē aparanch thā kō kāgal āyō samāchāl pāyā thā tapdārā kī jōī magār chhī sun mō-klyā cho sun dōī kō kām chōkasār kījō tapdārā he bharōsāu matī rahō tēhsil kī tākt kījō Mittī Asōī Sudī 12 Samvat 1738." Parwānā S. 1738 in Tojī docket cover.

(4) "Mahārāja Mahārāo jī Shri Umed Singh jī bachnātu Rahelāwan kā Kasbā wā wāīē gaon kā Patel Patwārī disē aparanch thā kā gaon kī chak bandī karwā tapdār mōkīō chhe sun napaī chōkas sun dōī dī wōr kasrā aīhā mōkaljō Mittī Mhā Sudī 7 Samvat 1862.

Petiyā : Tapdār (takā) 6. Kanūngō Barān kō, Chāudhī Bārān kō.

Halkārō (takā) 2. 5.

“Maharāja Maharāo jī Shrī Durjan Sāl jī bachnāit Madhkargarh kā Hawālētrī Indira Singh Harā Chāudhrī Mayā Rām panchōjī Sōwa Nāth desē aparanch kāgal thā kō āyō samāchār mālīm huwā thā na dōnūn gaon kā khasrā wā nāj kī rasīd mōkhrī chhī sun ānī pōhōnchī Mittī Mahā Sudr 11 Samvat 1806”

Parwānā S. 1806 in Tōjī dō warī Jamā Kharch Jamā Bandhī, Samvat 1806.

(5) "Mahārāja Mahārāo jī Shrī Umed Singh jī bachnātu Māuza Hanotyā kā Pajwārī desē aparanch

(e) "Maharāja Maharāo jī Shrī Durjan Sāl jī bachnāu Maṭua Madhuberā kā paṭel paṭwār̄ diṣē aparā-nch uṭhā Shāh Tōḡar Mal Ihān̄ kā hal chāl chhe tī kā baṇā syālū unhālū kō ādhū ādhī nīkharcho sāl hī sāl baṇṭī dījō wōr kōṭ bāt kī dikatī yā sun matī karō Mittī Jaith Badr 12 Samvat 1792." Par-wānā S. 1792 in Tōjī J. K. J. B. S. 1792.

(7) "Mahārāja Mahārāo jī Shrī Umed Singh jī bachnātu Kusbā Kanwās kā patel patwārī dī sē aparanch

thā kā gaon ma fa(sī) Kharīf kō aīthā mōkalō chhe sun sāmāl hōr khēt māl kī rakhwalī Karāwījō Mittī
Kārī Sudī 11 Samvat 1860." Parwānā S. 1860 in Tōjī docket cover.

(8) 以下の命令書の語彙は、二つの村に関する異なった事柄に関する命令が一つの文章に記載されている。前半部分が邦訳した部分で、後半は新村建設に関するものだが、煩雑になるので後半部分は省略。

"Mahārāja Mahārāo jī Shri Umed Singh jī bachnātu Mardhā Lachhyā (Rām) dasē aparanch ari āī samachār mālūm huwā Dityākherī Urmāl kī jāth chōr āsāmī pachīs tīs kā āyā khalānā ma sehnā sūtō chho tī sun jhagrō huwō chōr bhāgī giyā sehnā kā jakham lāgiyā lakhī sun abe tī sehnā ha das rūpiyā malām patī kā rūpiyā duwāwījō…………… Mittī Mahā Badī 12 Samvat 1860." Talīk Shri Hajūr kā Parwānā kī S. 1860 in Tōjī docket cover.

(9) Talīk S. 1862 in Tōjī docket cover.

(10) "Mahārāja Mahārāo jī Shri Umed Singh jī bachnātu Sakhet kā Hawālgir Shāh Kānjī Dās di sē aparanch Jaswant Rāojī Hulkar kī fōj Ujīn ā chukī chhe ar Jhālīrāpātān sun jhagrō karwā kī chhe sun Sakhet Urmāl Paraganā kā gaon kā manakh kabīlā dhāndhā dhōr hōr tyā ha talā dījō fōz kī khabarē bāt nī rākhījō kuch huwā kī khabarē āwē jī bakhat manakh kabīlā dhāndhā dhōr gaon kā talē dījō gatlī rahē matē nākā Ghātā ke pukht bandōbast rākhījō Mittī Āsōj Sudī 10 Samvat 1860." Parwānā S. 1860 in Tōjī docket cover.

- (11) Parwānā S. 1774 in Tōjī docket cover.
- (12) Tālīk S. 1863 in Tōjī docket cover.
- (13) 次の注 (14) を参照。
- (14) “Mahārāja Mahārāo jī Shrī Bhīw Singh jī bachnātu Kaspā Chēchatī kā Jāgīrdār Mīr Chānd kā teh-elwā diśē aparanch uṭhā Shāh Samēl Patwārī kadīm dhartī pāwē chhe bīghā tīs sun hāsīl ī ha khāwā dījō ī sun kōī bāt kī dīkatī matī karō Mittī Mahā Badī 6 Samvat 1774.” Parwānā S. 1774 in Tōjī docket cover.
- (15) “Mahārāja Shrī Bhīw Singh jī bachnāu Barōd kā Hawālīgīr Pars Rām Hārā Chāudhī Gōrdhan Panc-hojī Jasun diśē aparanch Lāl Bihārījī kā pandā Māuza Achlāktīkhetī ma dhartī bīghā 71 pāwē chhe sun yā ne arj karī mhā sun ijāradār dīghadī karē chhe jai ei Shrī Rām Singh jī kā amal mai pātī āyā chhe tō wā sun kahejō sun yā sun dīghadī na karē Mittī Kātī Sudī 6 Samvat 1766.” Parwānā 1766 in Tōjī docket cover.
- (16) “Mahārāja Mahārāo jī Shrī Durjan Sāl jī bachnāu Parganā Sangōd kā Hawālīgīr Chāudhī Dōlātī Rām diśē aparanch Māuza Bōrīnō-bujārkh ma Bhat Kīrpā Rām dhartī bīghā 31 anke iktīs pāwē chhe sun Jāgīrdār Karan Singh Rāthōj yā sun daghadī kar chhe sun thā Karan Singh sun tākī kījō sun yā sun kōī bāt kī daghadī kar nhī Mās Basāth Budī 6 Samvat 1780.” Parwānā S. 1780 in Tōjī docket cover.

- (17) Kagzāt S. 1784 in Tojī J. K. J. B. Samvat 1784.
- (18) Parwānā S. 1784 in Tojī docket cover.
- (19) Parwānā S. 1784 in Tojī J. K. J. B. Samvat 1784.
- (20) Tāqsim Tafa Raḥlāī & Sārheḷā, Samvat 1780. Tāqsim Tafa Barōd Samvat 1781.
- (21) Jamā Bandhī Māzra Tōran Parganā Barōd, S. 1797 in Tojī J. K. J. B. Samvat 1797.

むすび

本稿は宰相ザーリム・シングのもとに、中央権力の強化がはかられてゆくなかで、主としてその考察の焦点を村書記の職務や機能にしているため、史料制約もあり、比較的静態的な研究に終始することになった。本来、村書記の考察は村長についての考察とともになされねばならず、また地方行政機構のなかにかれらを十分に位置づけて論ぜねばならない。その点、未だこの考察は不十分であることをまぬがれない。

ところで、村書記は村長とともに、王国の地方行政、なかんづく村落統治の中心をなすものであり、その意味で中央権力にとってかれらへの支配は決してゆるがせにできないものであった。村長や村書記が王国政府に地稅台帳類を提出する際には、必ずといってよいほどに次のようなことを記した誓約書 (likhtan, likhat) を出している。「何らかの金額を着服したり、村落の基金を(勝手に)徴収したり、あるいは(許可なく)唯かに与えたり(勝

手に)盗ったりしたならば」、あるいは「徴税額を少なく記載したり」、「隠匿したり」したならば、「お上の処罰」を甘んじて受けるということを、かれらは一様に誓っている。⁽¹⁾

これらは表現を異にするにせよ同一の事を述べたものであり、特にザーリム・シング時代の文書のことばでもつていえば、国家に対して「廉直をもって職務に精励せよ」(*danantdār sun chākri karvā jasi*)⁽²⁾ということなのである。このことは、こうした役人が、国家の徴税額を着服したり、村民から収奪をおこなうことが多かったことを示すものかも知れない。

そうした状況に対して、ザーリム・シングの強力な支配が登場し、それが在地社会に強く及んでゆくことは一つの歴史的な方向を示すものであろう。それは村落社会の村民のみならず、最近簡単に言及した村長⁽³⁾についても同様で、村書記についても同じような影響を受けることになったものと思われる。とりわけ、強力な集権的支配を在地社会に及ぼしてゆきつつあった中央政府にあっては、地方行政の任にある役人への支配と統制は、当然のことながら厳しいはずのものであった。次の史料はこの間の事情をなまなく伝えるものであろう。

グ(コータ) 国王陛下ウメッド・シングからレハラワン(郡)のハワールギールであるメヘター・サンカル・ダットおよびビッラードルに宛て。そちの(支配)下にある、つまりそちらの(役所に勤務する)事務官^{サマント}のパンチョーリー・アマーム・ワグスが(理由もなく)いなくなってしまった。それ故、この男の母親^{マタ}および妻^{ヤト}を検束しておけ、自宅から二人を外に出すことを禁ずる。サンバット暦一八六二年スラーワナ月の陰半月一五日(西暦一八〇五年七月二七日)⁽⁴⁾。

いかなる理由によるかは不明であるが、ともかく職務を放棄して蒸発してしまった郡の事務官に対して、その

母親と妻を自宅監禁下におくことによってかれの罪を問うというきびしい内容のものは、やはりザーリム・シングの支配下に生じた中央権力の強化を示すものであろう。これより一〇〇年ほど前のS・一七六八（西暦一七一）年の命令書には、警察長官^{Ṣarṭāḥ}が逃亡してしまったために、国王はハワールギールに対して、かれの解職を命じたことが記されている。しかし、ここに記されているのは解職だけであって、それ以上の処罰は、かれおよび家族にはもとめられてはいない。⁽⁵⁾

さきにアヒール部族の者が逃亡した村番に代って、新しく村番に任命されるのをみたが、巡亡した村番が事務官の事例にみたようなきびしい処罰を受けていないのは、これがザーリム・シングの統治がまだ始まった頃の史料だからかも知れない。それにしても、右の事務官の事例はザーリム・シングの統治のきびしさをまざまざと感じさせるものである。

最後に触れておかねばならないことは、邦訳（Ⅱ）でもみたように、役人が国家の要請あるいは国家の意向を体してその職務に邁進してゆく際、その過程で生ずる農民との摩擦やかれらの不満が、役人の「尊大」、「おごり」⁽⁶⁾（*ḡarwā = ḡarbāz*）という個人的な責任にともすれば転嫁される可能性であらう。国家の職務を忠実におこなうことが、しばしば農民の収奪となり、逆にそれが国家の側から役人の苛斂誅求、横暴という個人的責任に帰せられるということは、歴史上しばしばみられるところである。

こうした国家の論理と個人の論理は、また在地社会に身をおく者にとって、つまりは村長や村書記にとって、一方では役人として、他方ではその地域社会の成員（その代表としての地域社会の論理）としての二律背反の立場にかれらを苦悩させることもあつたはずである。

職務を放棄した事務官の家族が自宅監禁という拘束状態におかれているところに、ザーリム・シングの統治の一面を見たが、他面ではそれは右に見たような矛盾した関係を断ち切って、国家との関係に一元化しようとする方向を志向するものであった。それはどこまで、どのようにして可能とされたのであろうか、ザーリム・シングの統治の時代が担っていたものの一つは、ここにあるのではないだろうか。

注

- (1) “J.iktan. Māuza Bhagwānpurā kā paṭel paiwārī āgē Samvat 1794 kā sāl kī jamā bandhī samajhā sun kōī āk churāyā hōī wā malhō ughāyā hōī wā kōī ha diyā liyā hōī tō darbār kā gunagār Mitī Asādh Sudī 15 Samvat 1794.” in Tōjī J. K. J. B. Samvat 1794.
 “J. Māuza Mudailā kā paṭel paiwārī āgē mhā Samvat 1773 kī jamā bandī smajō mhā nō rakam gharī mandāī hōī sun mhā man manāw wōr bākī Ru. 10.25 kī ; hawālgrī kā tō 1¹/₂ , paṭel paiwārī sun 8⁵/₈ .” in Jamā Bandhī Māuza Mudailā Parganā Nandgaon Samvat 1773. etc.
- (2) Taluk S. 1863 in Tōjī docket cover.
- (3) 前掲拙稿「十九世紀初頭ラージャスターン地方における在地支配の一面」参照。
- (4) “Maharāja Mahārāo jī Sutrī Umed Singh jī bachnātu Rahelāwan kā Hawālgrī Mhatā Sankar Dat wā Bilādār dasē aparanch thā kā uṭhā kō Kārkūn Panchōjī Amām Wags garhāzar huwō sun ī kī mā wā lugai ha bandobast rākhjō ghar ma sun dōnōn īk misarwā dō matō Mitī Sawan Budī Amaws (=15) Samvat 1862.” Khātā

Rahelāwan kō S. 1862 in Tojī docket cover.

- (15) “‘Mahārāja Shri Bhīw Singh jī bachnau Surtānpur kā Hawālīgīr Prōhit Sūt Rām Thākur Jandū Rām diśē aparanch thā kō kāgal āyō samāchār mālum huwō thā kōtwāl kā wāste likhō cho ujhā narubārī cho sun tō Palāithā ujhī gayō sun ū ha jhakh marwā dō ū kī ēwaz Kōtwāl Durga Singh Tuwar mōkalō cho sun dar mahō Ru. 10 anke rupiyā das kō diyā jāō Mās Chait Badi 7 Samvat 1768.” Parwānā S. 1768 in Tojī docket cover.

(6) 邦訳〈II〉を参照。